

---

**目覚めたらファンタジーな異世界でした。**

雨と傘

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

目覚めたらファンタジーな異世界でした。

### 【Nコード】

N5353V

### 【作者名】

雨と傘

### 【あらすじ】

書き直した話から投稿していきます。目が覚めると、私の知らない世界だった。そこは魔法、エルフ、獣人、モンスター、ドラゴンが存在する世界。そんなファンタジーな世界で研究者で魔術師な人に拾われました。なぜか体が小さくなっていて、ちょっと困ります。4歳に逆戻りしてしまった主人公・ハルキがファンタジーな異世界で生きる話。

## 寂しい場所

真っ白い世界

どこまでも白くて白い世界

大地と空の境目などなく

風も吹かず、音もなく

冷たさもなく、暑さもなく

光もなく、影もない

そんな世界にその人はいる

白い髪

白い肌

白い服

白に満たされた世界で紅い唇を微笑みの形に歪ませて笑うのだ

私達の間にはなにもない

言葉も感情も思惑もなにもない

それでも彼女は笑う

私は…私は？

そして私は目覚ましの音で目を覚ます

体を起してあの白い場所が夢なのだと思いつく

そしていつも私は思うのだ

あそこは寂しい場所だと



## プロローグⅡはじまり

だんだんと暗くなっていく森。纏わりつく風は冷たい。  
遠くに聞こえる狼の遠吠えに恐怖が甦る。

怖い、寂しい。

ぼろぼろと涙が頬を伝う。

膝からは血が流れている。

ズキズキと痛み、それが恐怖に拍車をかける。

誰もいない森の中。

薄暗い森の中。

一人ぼっちの森の中。

一人は寂しい。

一人は怖い。恐いよ。

恐い、怖い、寂しい、いやだ。一人はいやだ。

いやだ、いやだよ。

ねえ、だれか… たすけて。

「なんで、こんな所に子供がいるんですか。」

光が、蛍のように飛んでいる。

淡い金色の光が、ふわふわと舞う。

その人は私を抱き上げて、大丈夫だと言ってくれた。  
暖かさを感じながら、私は眠りへと沈んでいく。

涙が一筋、零れていった。

## 第1話：人生なにが起こるか分からない

誰かが言っていた。人生なにが起こるか分からないものだ。

私もそう思う。同感だ。

未来は誰にも分からない。だけど、なんとなく想像はしていた。

高校を卒業して大学に行って就職して恋愛なりお見合いなりして結婚するのだろうと。

子供は出来れば3人ぐらいで老後は田舎でゆつくりと過ごして子供や孫やできればひ孫に囲まれながら大往生：そんな人生だったら言う事なしだった。

自分が人を好きになるなんて想像できないけど。刺激的な人生が欲しかったわけではない。

けどもう一度言おう。人生なにが起こるか分からない。

とりあえず私の身に起こった出来事をかいつまんで説明しよう  
学校の帰り道に貧血を起こして倒れて気が付いたら森の中にいて  
なんか狼っぽいのに追いかけてられて美形な研究者で魔術師な転生者  
に拾われました。まる。

わけが分からないだろうが、これが私の身に起こった事だ。詳しく説明していこうと思う。

私はしょっちゅう貧血を起こす訳ではないんだけど、たまになるんだよね貧血。遅刻しそうになって朝ごはん抜いたのが原因だと思うけど。朝ごはん食べればよかったと後悔しながらブラックアウト。

で、気が付いたら森の中にいました。

狼っぽいのは シーザ というモンスターだそうだ。三つ目……つまり額に第3の目があるモンスター。

毛色とかは私の知っている狼なんだけど、額に目があって怖かった。

しかも群れで追いかけてくるから怖かったよ。

そこを美形な研究者で魔術師な転生者のフェイ・クルーニクスに拾われた。

私は親しみを込めてフェイさんと呼んでいて、綺麗な女の人と間違えそうなほど綺麗な人だけど男だ。ベージュのような優しい色の髪と目をしている。

聞いたことないから推測だけど歳は20代後半。

そして、前世の記憶がある人だ。

たぶん前世は私と同じ所。いろいろと共通点があったし、間違いないと思う。

フェイさんにはいろんな事を教えてもらった。

ここが私がいた場所とは違う事。

エルフ族や獣人族といった種族が存在する事。

魔法という力が存在する事。

そして私の体が小さくなっているという事。

驚きや戸惑いもなく、それは事実としてストーンと胸に落ちた。

フェイさんは私を取り乱したりすると思っていたらしく、ちょっと驚いていた。

体が小さくなっていたのはちょっと困ったけど。ちょっと困っただけだった。



ちなみにフェイさんは光を操る魔法を使える。

実際に見せてもらったけど、とても不思議でとても綺麗だった。

私にも使えたらいいなってフェイさんに言ったら、今度魔力を調べれる道具を持ってきてくれるそうだ。

魔力は魔法が使える力で、魔力があると魔法を使えるんだって。ちよつと楽しみ。

以上が私の身に起こった事。本当に人生なにが起こるのか分からないよね。

あつちの世界で私がどうなっているのか気にはなる。だけど寂しいとか未練はない。

あつちより危険が多い世界だけど、帰りたいとは思わない。来てしまったのは仕方が無いと思うし、過去に戻る訳でもないから。どうして私なんだろうなーっていうのは気になるけど。

そんな私はフェイさんの家で家事とかをこなしながらこの世界の事を教えてもらっている。

いや、家というよりは屋敷といったほうが正しいかもしれない。

森に囲まれた屋敷。

体が小さくなって動き辛いけど、これはこれで新鮮。

カウハラ ハルキ

河原春樹 16歳。4歳になってしまいましたが、楽しくやっています。

## 第2話：胸がきゅってするのは

フエイさんが真剣な面持ちで紙に書かれた文字を読んでいる。  
私は緊張しながら結果を待つ。  
刻々と時間が流れる。

「…うん、問題はないですね。」  
「やったー！」

思わずガッツポーズ。よかった、やっと終わった！

「まさか3ヶ月で書けるようになるとは思いませんでしたよ。」

今、私がフエイさんに教えてもらっていたのはこの世界の言葉の一つ。シェイア公用語。この世界ではほとんどの人が使える言葉だ。

「んー、頭の中にある知識と照らし合わせながらだから書けるようになるのが早かったのかも。」

「なんて言うか…ずるいですよ。私はこの世界に来た時は言葉が全く分からなくて苦労したのに。」

「不思議だね。私はこっちの言葉を知らないのに話せるし読めるなんて。まあ、シェイア公用語だけだけど。」

「それだけで十分ですよ。」

そう、なんでか分からないけど私はこっちの言葉が話せるし読める。

今フエイさんに教えてもらっていたのはシェイア公用語の文字。読めるんだけど書けるようになるまで3ヶ月かった。

「でも、自分の知らない言葉を当り前のように使えるのは変な感じ。ちよつと怖いかな。」

「…まあ、ラッキーだと思っておけばいいですよ。」

それより、紅茶が飲みたいです。そろそろお茶にしましょうか。」

フエイさんは紅茶が好きだ。1日に何回も飲む。もはや紅茶中毒と言ってもいいと思う。

「私は砂糖入れてね。」

「何言ってますか。ハルキも手伝うんですよ。」

「えー、4歳児に手伝わせるんですかー。」

「中身は16でしょう。」

ここに来て3カ月とちよつと。

軽口も言い合えるようになった。それが嬉しい。あっちでは、そんなこと出来なかったから。

胸がきゅつとなつて、温かい。

胸がきゅつて苦しくなるのは、悲しい時だけじゃないんだね。

「…? どうかしました?」

「なんでもなーい!」

閑話：『あっち』と『こっち』

「ねーねー、フェイさん。」

「なんですか。」

「ちょっと思っただけだね、前の世界の事を『あっち』って言うてこの世界を『こっち』って言うてるよね。」

「…そういえばそうですね。」

「混乱しない？」

「しないと思いますよ。」

「絶対するって！で、提案なんだけど。  
あっちを『科学世界』って呼んでこっちを『魔法世界』って呼ばない？」

「…そのまんまじゃないですか。」

結局、私が考えた案は使われなかった。理由はややこしいから。いいと思うんだけどな、『科学世界』と『魔法世界』。



### 第3話：初めての外（1）

それは半年がたった頃。始まりはフエイさんの言葉だった。

「ハル、インクがどこにあるのか知りませんか？」

「知らないけど…インク切れたの？」

「そうなんですよ。仕上げないといけない資料があつて。困りましたね。」

…そうだ、明日『市場』に行ってみませんか？」

「市？それって私が知っているのと同じ？」

「同じだと思いますよ。いろんなものを売っている場所です。ハルキは外に出たことないでしょう。」

「…そういえば森の外に出たことない。」

よく考えたら街とかに行つたことがない。食料とかは運んできてもらつてるし。庭広いし、散歩なら森を歩けばいいし。

「ね。行ってみませんか？」

用事があるから、ついでに見て回りましょう。」

「うん、いいよ。」

そんなこんなで、初めての外出決定。

…ちよつとめんどいと思ったのは秘密。



#### 第4話：初めての外（2）

第一印象は『賑やか』だった。

ずらりと簡易な店が並んでいて、人の声が溢れている。見た所、食べ物売っている店が多いみたいだ。屋台っぽい店もある。いい匂いだな！。

「フェイさん、いい匂いがするね。」

「いつもこんな感じですよ。」

「へー。」

私の今の恰好は目深に帽子をかぶって、シンプルな半ズボンをはいている。帽子の中に髪を全部入れているから男の子に見えると思う。

フェイさんが言うには黒眼は珍しいから、隠しとけだそうだ。

「とりあえず、用事を済ましてから見て回ってみましょう。」

「賛成。」

フェイさんに手を引かれて歩き出す。こういつ時さりげなく手を引いてくれる所が優しいと思う。

「フェイさん、あれなんですか？」

「あれは『リママ』という葉物野菜です。苦味があります。」

「じゃあ、あの吊るしてあるのは？」

「『ハシユムル』です。」

南の方で獲れた魚を干したもので、『ハシユムル』は魚を干したものの総称です。

この辺りは海が遠いですから、新鮮な魚介類が手に入りにくいんですよ。

その代り、森や草原などが多い。

だから新鮮な野菜や果物が多いんです。」

「へー。」

どれも初めて見るものばかりで楽しい。

知らないものばかりで、質問ばかりしてしまう。

「…ああ、ここですね。」

綺麗な柄の布が並べられている店の前で止まる。ほかには食器や本が数冊山積みになされていたり、色々な物が置いてある。

「なんか、ごちゃごちゃしている店ですね。」

「雑貨屋みたいなですよ。」

「いませんね。…おーい！」

フエイさんが大きな声を出すと、店の奥から物音がした。のそのそと大きい影が歩いてくる。

「ほいほい、なんのご用ですか…。」

店から出てきたのは、熊みたいなおじさんだった。

## 第5話：初めての外（3）

「ん？」

店から出てきた男は私達を見て、訝しげな顔をした。だけど、次の瞬間には凄く嬉しそうな顔になった。

「おー！フエイじゃねえか！

ひっさしぶりだなー！元気にしてたか？」

店から出てきた男は豪快に笑いながらフエイさんの背中をバシバシと叩く。

なんか、熊みたいな人だ。

頭には布を巻いているから、工事現場のおじさんみたい。

「ん？お嬢ちゃんは坊主の連れか？めっずらしいな！お前が誰か  
とここに来るなんて。初めてかもしれんぞ！」

おじさんがしゃがんで目線が同じ位置になる。

あれ、この人耳が長くて尖ってる。

それに布の間から見える髪の毛が緑色だ。

もしかして…。

「お嬢ちゃん、名前はなんだ？」

これ、答えた方がいいのかな？

ちらつとフエイさんを見たら頷いた。

「…ハルキ。フエイさんにはハルって呼ばれてる。」

「おーそうなのか。歳はいくつなんだ？」

「…4歳。」

「そっか、4歳か。しっかりしてんなー！

村の悪ガキどもに見習わせたいぐらいだ。

ちゃんと答えられた良い子にはこれをやろう！

ほーれ、手え出せ。」

慌てて手を出すと、手のひらにコロコロと丸い物が落ちてきた。  
なんだろう、これ。色は茶色で、クッキーみたいだ。

「フエイさん、これなに？」

「『クク』というお菓子ですよ。」

「女房が作ったやつだ。絶対うまいから一回食べてみるって！」

女房ってことは奥さんいるんだ。

『クク』はほのかに甘いにおいがするから、甘い物なのだろう。  
おそろおそろ口に入れてみる。

「どうだ？」

「…おいしい。」

口の中でほろほろと崩れる。

ほろ苦くて、ココアみたいな味だ。

「そつかそつか！そりゃあよかった！」

お礼とか言った方がいいよね。

「…おじさん、ありがとう。」

「どーいたしまして！」

そーいや、まだ名前言ってなかったな。  
俺の名前はジエイドだ！」

「ジエイドさん？」

「さんは付けなくていいぞ。」

「じゃあ…ジエイドおじさん？」

「お！いいな、そのジエイドおじさんっていうの。」

ぼむぼむと頭を撫でられて、ちょっと帽子がずれたと思ったたらジエイドさんが直してくれた。

なんか恥ずかしい…嬉しさもあるんだけど。

## 第6話：初めての外（4）

「…鼻の下伸ばしてないで仕事してくださいよ。」

「おー、悪いな。で、なにが必要なんだ？」

フエイさんを見ると、ムスツとしていた。

ジェイドおじさんはちよつとニヤニヤしている。

…なんで？

「いつものインクを多めに。」

「了解。ちよつと待ってる。」

ジェイドおじさんが店の中に入っていく。

出てきたと思ったら、小さな木箱を持っていた。

「ほい、これでいいか？」

「はい、大丈夫です。」

そういうと、フエイさんはジェイドさんに何かを渡した。

よく見えなかったけど、お金だと思う。まだ知らないから、教えてもらわないとな。

「ちよつと市場を見て回るんで預かっておいてもらえませんか？」

「ああ、いいぞ。見て回るってことはハルキは市は初めてか！」

それなら、あっちの広場で面白いのがあるぞ。」

「そうなんですか。行ってみましょうか、ハル。」

「うん。」

また後で、とジェイドさんと分かれて歩き出す。  
面白いのってなんだろう。



## 第7話：初めての外（5）

店からだいぶ離れた。

ちよつと疑問に思つた事を聞いてみる事にした。

「ねー、フエイさん。

ジエイドさんつてもしかして『エルフ族』？」

「…あれ、ハルにエルフのこと教えましたっけ。」

「うつん、まだ教えてもらつてない。

だけど、本でちよつと読んだ。」

「そうですか…。」

本って事は、もしかして『あの部屋』の本じゃないですよね？」

「え、ダメだった？」

「いや、ダメというわけではないんですが。

危ないですから、今度からは私に一言言つてからにしてください。」

「はい。で、ジエイドさんは『エルフ族』なの？」

「そうですよ。」

「やっぱり。だけど、エルフって色白で細いイメージがあったから

ちよつとびつくり。

挿絵のエルフもそんな感じだったし。」

「まあ、そうですね。」

エルフにもいろんな人がいますよ。」

「へー。」

## 第8話：初めての外（6）

広場に着くと、沢山の人がいた。軽やかでリズムの良い音楽も聞こえてくる。

なんか、面白そう。だけど、人で見えない。こういう時体が小さいと不便だなー。

「ハル、見えないでしょう。抱っこしましょうか？」

「うーん…。」

抱っこしてもらえば見えると思うけど…。

むー、と悩んでいると今の私と同じぐらいの子供の声が聞こえた。父親らしき人に肩車してもらって、きゃっきゃと笑っている。

…あ。

「フエイさん、肩車して。」

「肩車ですか？」

「うん、肩車。」

肩車やったことないから、やってみたい。」

「いいですよ。」

フエイさんに両脇を抱えられて、肩に乗せられる。

…私、しゃがんでもらって肩に乗つかるのをイメージしてたんだけど。

「どうですか？」

「すごい高い。」

景色が一転した。

見上げていた物が、下の方にある。空が近くて、風が気持ちいい。ちよつと不安定だけど、フェイさんが支えてくれているから大丈夫。

目線が高くなつたおかげで、見えなかったものが見えるようになった。

人の中心で女の人が踊っている。腰には長い布を巻いていて、踊るだびにひらりと舞う。

後ろにはトコトコと太鼓に似た楽器を叩いている人がいる。

そして周りにキラキラと水が舞っている。

踊り子が舞うたびにサラサラと動いて、きれい。

「すごい。あれがジエイドおじさんが言っていた、面白い物？」

「そうですよ。」

『人魚の舞』という踊りです。

元々は雨乞いや荒れている海を沈めるなどの『水』に係する儀式でした。

ですが今では踊りの一つですね。

ここからでは見えないですけど、踊り子の腰に巻いてある布は鱗の模様なんですよ。

それで、人魚を表しているんですね。」

「へー、そうなんだ。」

太鼓の音がだんだんと早くなっていく。

それと同時に踊りも早くなって、水の動きも早くなる。  
くるくると水が舞う。水の中で人魚が舞う。

無性に、人魚という存在に会ってみたくなった。

## 第9話：初めての外（7）

『人魚の舞』が終わると、私達はいろんな所を見て回った。

アクセサリー屋みたいな店には若い女の子がいて、あちこちでおばちゃんが話していた。

屋台のおじさんはちよつと顔が怖かったけど、売っていたお団子っぽいものはとてもおいしかった。

歩きまわって、食べて、たくさん話して笑って。とても楽しかった。

歩き疲れてしまつて、今はフエイさんに抱っこしてもらっている。瞼が重くなつてきて、目をこする。

「ハル、眠いんですか？」

「…うん。」

「寝ててもいいですよ。」

「…うん。」

とろり、と眠気がやってくる。

「おやすみ、ハル。」

優しいフエイさんの声。暖かい腕はなんだか安心する。柔らかな眠気に誘われて、私の意識は沈んでいった。



side・フェイ：いつか、離れてしまっけど

腕の重みが少しだけ増した。ハルの顔を見れば、すやすやと眠っている。今日は歩きまわったから疲れたんだろう。

ハルが来てからもうすぐ4カ月。

ハルは凄い早さでこの世界の知識を吸収している。  
教えている時のハルはとても楽しそう。興味深々、という顔をしている。

それで教えるのが楽しくて、沢山の事を教えてたくなる。

恐らく、ハルは私と同じ世界から来たのだろう。

私は一度死んで、この世界に生まれた。

その事実が受け入れなくて、昔は全てを拒絶していた。残してきたものを想って、泣いた事もあった。

あいつに出会っていなければ、まだ世界を拒絶していたのだろう。  
…もしかしたら、世界を壊そうとしていたかもしれない。

でけどハルは世界に戸惑う事もなく拒絶する事もなかったただ受け入れた。

体が幼くなっていることも知らない言葉が分かる事も受け入れた。  
元の年齢は16だと言っていたが、大人びていると思う。

…いや、大人びているのではない、達観している。諦めているようにも感じた。

「あー、寝ちまったのか。」



「疲れたみたいですネ。」

眠る顔は安心して見えるようにも見えて、信頼されていると思うと嬉しい。

「しっかし、お前が人を連れてくるなんて驚いたぞ。

しかも仲良く手を繋いでなんてな。

…ハルキは、お前の家に住んでるのか？」

「はい。」

「そうか。お前が傍に誰かを置くななんてな。

しかも一人前に嫉妬なんてしやがって。あれは笑えたぞ。」

「ほつといてください。

あれはちよつと…横取りされたみたいで嫌だったんですよ。」

「横取りねえ。…お前ももう父親かあ。」

「たしかに、養父みたいなものですけど血は繋がってませんよ。」

「俺には父親のように見えるけどな。」

「そうですか。」

父親か…。いまいち、ピンとこない。

けどもし子供がいたら、こんな感じなのだろうか。この子の成長が嬉しくて、楽しみで。心配で、待ち遠しい。

「なあ、フエイ。」

「なんですか？」

「…この子は『風』だよ。」

「…。」

「風に舞う綿毛みたいにふわふわと飛んで行っちまいそうだ。飛んで行かないように見とくんぞ。」

「言われなくても。」

言われなくても、分かっている。

森の中で泣いていたこの子を見つけた。これもなにかの縁なのだろう。

「…あつはつはつは！やっぱりお前は父親だよ。顔が父親だ！」

「どんな顔ですか。」

早く帰りたいんで預けていたの返してください。」

「はいはい、分かったよ。」

ジェイドが苦笑しながら店の中に入っていく。

ハルキを抱えなおすと、帽子がずれた。

この世界にも、黒髪黒眼の人間はいる。南のほうに多くて、前の世界でいう『ラテン系』の顔立ちだ。だけど、私は東洋人のような人にこの世界で会った事が無い。

それに、日本人の目はよく見ると茶色。この世界の黒眼は近くで

見ても、黒い。

遠くから見ると黒いのに、近くで見ると茶色なんて、この世界には存在しない。

どこの世界でも物好きはいる。目をつけられたら危ない。

…頼んでいた物、早めてもらうか。

「ほれ、これでよかったよな。」

「はい。…あれ、これは？」

インクが入っている木箱の上に、買った覚えのない物がおいてある。羽がいくつか付いた紐で、紐の両端には細工の施された銀色の金具が付いている。

「髪を結ぶやつなんだが、ハルキに似合うと思ってな。」

「いいんですか？」

「ああ、いいともさ！

お前の娘は俺の孫だからな！」

その言葉に目を見張った。

この人は…。あんなに拒絶していた『俺』を、『息子』だと言ってくれるのか。

「…ありがとうございます。」

オババさまに、その内顔を出すと言っておいてください。」

「おー、分かった。」

ほれ、早くしないと日が暮れるぞ。」

「はい、それじゃあ。」

ハルを片手に抱えなおして歩き出す。

反対には木箱を持っているから、ちよつと重い。

この子との生活は、思っていたよりも心地よい。

だけど、ずっと一緒に暮らせるわけではない。私は、人であつて人で無い。だから、いつか別れの日が来るだろう。それは、絶対不変の未来だ。

だけど、その日が来るまでは。

その日が来るまでは、見守っていたい。

沢山の事を教えて、沢山の事を経験させてやりたい。

もしかしたら、前の世界に帰ってしまうかもしれないけど。

世界を越えて、離れてしまうかもしれないけど。

同じ世界にいても、離れてしまうだろうけど。

それでも。

腕の中の存在を、この重さを離してしまわないように。落としてしまわないように。抱きしめた。

## 第10話：本の部屋（1）

フエイさんは研究者だ。

仕事柄、資料や参考文献といった本が多い。

だから、『本の部屋』という部屋がある。これは私が命名したんだけど、とにかく本が置いてある部屋だ。貴重なものはフエイさんの書斎に保管してあるんだけど、必要なくなった資料は『本の部屋』にある。というか溜めこんである。

『本の部屋』は、埃っぽい。だけど前よりはだいぶ綺麗になった。私は『本の部屋』を掃除・整頓するのを日課にしている。…ただ、どなかかなか進まないんだよね。

「よっし、今日も頑張るぞー！」

埃を掃いて、床を拭いて、本を整頓する。

手前から掃除してきたい、3割ぐらいは終わったと思う。

奥の方には、天井に届きそうなくらいまで積まれた本もある。こんなになる前に掃除しようよフエイさん。

「…これ、どうしよう。」

私の身長より高く積まれた本をみて、思わずため息が出る。持ち上げるのは無理そう。とりあえず、上の本から掃除しようかな。

一番上の本を取ろうと手を伸ばす。

…届かない。

つま先立ちになってみる。

うーん…あともうちよつとで届きそう。

「ふんにゆっ！」

変な掛け声が出た。ちよつと恥ずかしい。

思いつきりつま先立ちをして、手を伸ばす。

あと、もーちよい…。

「取れた！……げっ。」

ぐらり、と本の山が揺れる。バサバサと音を立てながら本が降ってきた。

「うっ、いたい…。」

頭に本が当たって痛い。

涙目になりながらズキズキする頭を押さえる。私の周りには本が散乱していて、掃除して整理した本も…。

「折角、きれいにしたのにまたやり直し…。」

なんか、掃除するのが嫌になってきた。

とりあえず、埃が酷い本から綺麗にする。

埃を拭き取ると、霞んだ文字が見えてきた。

題名は『灰かぶり姫』。なんとなく、見た事がある。

…たしかシンデレラは『灰かぶり姫』という意味ではなかっただろっか。

内容が気になって読んでみると、読んだことのある話だった。

いままでも、あれ？と思うような本があつた。偶然だと思つて  
いたが、ここまで同じだと偶然だとは思えない。

## 第11話：本の部屋（2）

「フェイさん、こんな本見つけたんだけど。」

書斎にいるフェイさんに聞きに行った。

「フェイさんは本を受け取ると、「よく見つけられましたね。」と言った。」

「その本、シンデレラだね。なんでこっちに同じ本があるの？ほかにも読んだことのあるような童話とか昔話とかがあったんだけど。」

「昔、私もそれが気になって調べた事があったんですよ。」

これを書いたのは『ジェア・ホロルス』という人でしてね、『見覚えのあるタイトル、読んだことのある話』を多く書いている人です。」

「見つからない本はないと言われるほど巨大な図書館を作ったことで有名な人で…たしかその子孫が代々館長を務めているそうですよ。」

その話を聞いて、私は1つの可能性を思いついた。

「もしかしてその人、私達と同じ世界から来たんじゃない？」

「そうだとしても、確かめようがありませんよ。もう、2000年以上前に生きた人ですから。」

「そうなんだ…。」



あーもう、なんかスッキリしないなーっ！」

見えそうで見えない。2000年という長い歳月が『ジェア・ホルス』を霧で覆い隠している。そのことにモヤモヤとして煮え切らない気持ちになっていると、なにか考えていたフエイさんが口を開いた。

「…今度、行ってみましょうか『ホルス図書館』。

今は論文が立て込んでいて無理ですが、これが終わったらしばらくは何も無いですし。」

「フエイさん、行ったことあるの？」

「ないですよ。行ってみようとは思っていたんですけど、なかなか行けなくて。ですから、この機会に行ってみようと思うんですけど。」

「…うん、私も行きたい。」

もしかしたら、私達と同じ所から来たのかもしれない人。もう会えないけど、私はその人が残した物を見たい。この世界で生きた形跡を見たい。

## 第12話：朱色が運ぶ知らせ

「え…友達って事なの？」

「違います。知人です。」

ある日の午後。

やる事も終わって、私は庭で日向ぼっこをしていた。

そのに急にフェイさんが来て「人が来る。」と言われた。しかも、何故か肩に鳥を乗せながら。

「そうなんだ…。」

っていうか、フェイさん知り合いがいたんだね。」

「どういう意味ですか。」

いやー、だつてさ。

この家に来るのは食料とか運んでくれるお兄さんだけだったし。

フェイさんの知り合いとかが、訪ねてきたのって一度もなかったから。

フェイさんもフェイさんで、ずっと研究ばかりだし。

あ、でもジェイドおじさんが知り合いになるか。

「前に言っていた、魔力を調べる道具をついでに持ってきてくれるそうですよ。」

「そういえば、そんな話もあったね。」

それで調べれば、魔法が使えるようになるの？」

「訓練次第です。」

すっかり忘れていたけど、私にも魔力があるんだっけ。

魔力は魔法の源。魔力があると魔法が使える。

だけど、魔力には『属性』があつて、それを調べないと使えないんだっけ。

「そっか、訓練次第か。」

で、その鳥はどうしたの？」

鳥はずっとフェイさんの肩に止まっている。

大きさはインコぐらい。色は鮮やかな朱色だ。

「ああ、これですか。」

この鳥は『エルク』といいます。手紙を運ぶ鳥ですよ。」

「へー、そうなんだ。」

エルクは小首を傾げたり、ちょこちょこと動いたりする。

それに合わせて長い尻尾がふりふりと揺れる。

「…ちよつと、触つても大丈夫？」

「大丈夫ですよ。」

ゆつくりと、驚かせないように近づく。

近づいても逃げない。人慣れしてるのかな？

まあ、フェイさんの肩で大人しくしてたし、人慣れしてるよね。軽く頭を撫でてみる。

気持ち良さそうに目を細める。

「かわいい。」

ぽわぽわしていて、ちょっと暖かい。  
かわいいなー。

「ハルは、動物が好きなんですか？」

「え？…うーん、嫌いではないよ。」

「そうですか。」

フエイさんがエルクに手を近づけると、ちょこんと飛び乗った。  
手乗りインコみたいだ。

「手紙の返事を書き終わるまで、遊んでていいですよ。」

「いいの？逃げたりしない？」

「大丈夫です。」

エルクが止まっている手に、私の手を近づける。  
すると少し躊躇した後、私の手に飛び乗った。  
軽い重み。

「ありがとう、フエイさん。」

鮮やかな朱色の小鳥。  
青い空に飛んだら、綺麗なんだろうな。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5353v/>

---

目覚めたらファンタジーな異世界でした。

2011年10月8日19時25分発行